



巻頭言

みんなであることの意味を 味わえる保育

戸田雅美

個と集団の問題は、保育のテーマの一つです。人間が人間として生きていくためには、この問題を避けて通ることはできません。しかし、個というと「勝手気まま」「わがまま」という言葉に、集団というと「集団行動」「協調性」という言葉に結びついてしまうことも多いように感じます。特に、小学校に入るためには、集団に合わせるといふ意味での「集団行動」ができないと、「学級崩壊」につながってしまうと言われたりしています。

しかし、冷静に考えてみれば、個が個として発揮されることと、集団が集団として心地のよいものであることは、決して矛盾するものではありません。また、人間というものは、社会という集団を形成する時には、個と社会が矛盾しないような社会をつくっていくことが望ましいわけですから、社会性を身に付けていくということは、



決して、集団に合わせて「我慢」したり、集団の前では個としての自分を隠さなければならぬというようなものではないはずだ。

幼児期の子どもたちは、大人の考えに包まれて育っていきます。個と集団の関係についても、例外ではありません。「わがまま」を抑えて、「集団行動」ができるようになるというような、個と集団の考え方の大人と暮らすとしたら、子どもは、そのように生きていくしかないでしょう。しかし、子どもたちと大人も加わって、みんなであることの喜びを味わえる工夫が、幼稚園や保育所があれば、子どもたちは、違った姿を見せてくれます。

冬に、ある幼稚園で行われた公開保育では、こんな場面がありました。

お弁当を食べ、自由に遊んだ後、降園前にみんなで集まった時のことでした。この日は、子どもたちの希望もあって、みんなと一緒にこまを回すことになりました。この園の先生の話によれば、このところ、五歳児のクラスも、この四歳児クラスも、毎日のように、一人で回したり、数人で集まって技を披露し合ったり、クラスの全員で競い合ったりして、こま回しを楽しんでいるということでした。

三十人近い子どもたちは、みんな自分のこまを持って床に丸くなって座り、こまのひもを巻き始めました。すっかり遊びこんでいるらしく、ほとんどの子どもは器用にひもを巻いていきました。その一方、まだ慣れていないのか、とてもゆっくりと確か



めながらひもを巻いている子どももいました。もう巻き終わってしまった子どもも、すぐに回そうとはせずに、巻いている子どもの進み具合を見たり、おしゃべりしたりしながら、辛抱強く待つていました。

やっと全員が巻き終わり、いざ競争だ、というその時、一つのこまがみんなの前で回り始めてしまいました。「あーあー」「なんだよ！ たいち」「せっかく待つてたのに……」とみんなの声が響く中で、明らかにわざと早く回してしまったいちは、「……」と何も言わないままこまのひもを巻き始めました。それまでの「みんなで回したい」という気持ちだった子どもたちも、そういうことなら自分も早く回したい、やってしまおうか……という雰囲気が出始めたのを感じて、見ていた私もどきどきしていました。すると担任も、「そうだよ。たいち君、せっかくみんなでやろうって思っていたのに……」と言いました。担任のこの言葉は、たいちに、ほかの子どもたちの気持ちを伝えると同時に、ほかの子どもたちにも、初めにもっていた「みんなで……」という気持ちを思い起こさせる意味があったように私には感じられました。

しかし、一度崩れ始めてしまった三十人近い子どもたちの気持ちは、そうすんなりとは集まらず、さらに、また、まいのこまも回り始めてしまいました。巻き終わりそうになったたいちは、「ぼく、もうすぐ巻けるよ。先に回しちゃおう！」と言ひ出しました。「ずるいよ。待つててよー」と、まい。騒ぎが大きくなり始めました。

すると担任は、「たいち君、みんなに待つててもらったんだから、たいち君も、ま



「いちゃんを待ってあげよう」と言いました。そして、急に思い立ったように、「そういえば、今日はもも組さん、お休みの人がいないね。もも組さん、みんな来てました」と言うと、みんなは「イエー」と急にうれしそうになりました。さらに、「昨日は……。昨日も、お休みいなかったね」という担任の言葉を聞くと、また「イエー」と一段と声が大きくなり、「昨日は……」「その前の日は……」担任が言うたびに、「イエー」と顔を見合わせていました。とうとう、その週はずっとお休みがいなかったことがわかり、みんなは「イエー」と声を合わせて喜び合いました。

「巻けたよ！」とまいが立ち上がったのは、ちょうどその時でした。担任は「よかったね！ もも組みーんなで、こまの競争だね」と言い、子どもたちが「イエー」と応じたところで、みんなのこま回しの競争が無事始まりました。

ここでは、「みんなでこまを回したい」という一人ひとりの子どもたちの気持ちが集まって、集団になっています。そんな時に起こった危機を、担任は、全員が出席しているという喜びに結びつけました。みんなでするということと義務としてはなく、みんなですることの意味や喜びを味わおうとする保育がここにはあると感じた場面でした。このようにみんなですることの喜びを味わうことによって、それに伴って生じるさまざまな課題を乗り越える体験をもまた、「我慢」としてではなく、「喜び」として味わえることになるでしょう。

(東京家政大学家政学部教授)